

テニス小史 (2)

テオ・シュテムラー

経遠 雄三¹⁾・大家 一²⁾ 訳

1) 倉敷芸術科学大学生命科学部

2) 倉敷芸術科学大学学習支援センター

(2012年10月1日 受理)

国外追放されたイギリス宮廷は、その間フランスでボーム競技を行っていた。1660年のイギリス君主国家の復興と王室家族のイングランド帰還とともに、この競技はブリテン島で新たな全盛期を迎える。このように取り仕切ったのは「陽気な君主」といわれるチャールズⅡ世(1660-85, 生誕1630)だった。彼は享楽派でスポーツマンだった。そのことを彼の14人の庶子たちと朝5時からという早朝テニスプレイが証明している。この時代の計り知れないほど貴重な記録者サミュエル・ピープス⁹⁾がしばしば白いスポーツに対する王の情熱に言及している。彼の報告にはまた、この必ずしも不健康とはいわないまでも、だらしない生活を送る君主が競技の後に体重を量らせたともある。ピープスの記録にはまた1667年9月2日の日付の下に「今日、王は4ポンド減った」とも読める。テニスを恋人とするこの王はそれどころかコートに寝室を設置させたのである。

そして最後になおチャールズⅡ世の弟ジェイムズⅡ世(1685-88, 生誕1633)にも触れておこう。この王については1641年に画かれた全身像が残っている。これはホワイットホルの王室テニスコートでの8才の頃を写している — かなり相應しくない服装だが。

テニスを楽しむ王侯たちのリストは長いし、印象深くもある。そして宮殿だとかその他の貴族たちの居城のテニスコートの数は16世紀以来、恒常的に増大している。

わざわざ建物が建てられたこともしばしばあった — 今日、「テニスホール」と呼んでいるものである。以前は、「ボールハウス」と呼ばれていた。ボール競技が行われたからである。舞踏会(Ball)が催されたからではない¹⁰⁾。

このボールハウスの中にはスポーツに関する領域を超えて名声を獲得したものが幾つかある。1789年6月20日、ヴェルサイユのボーム競技館で身分制三部議会がその誓約で以って — 有名な「ボールハウスの誓約」¹¹⁾ — フランス革命を導いたのである。この建物は2年後に国民公会によって国民的記念物と宣告された。

初め1525年にウイーンに建てられた帝国ボールハウスは、1754年にマリア・テレージアによって新しく建設され、1855年まで利用された。そこからこの建物に隣接する行政関係の一帯は、しばしば「ボールハウス広場」と呼ばれた。

もう一つの帝国ボールハウスがプラハにあった。これは16世紀の中頃にフェルディナ

ンド I 世 (1556-64, 生誕 1503) のために建てられた — 先に触れたテニスに熱狂したカステリヤのフィリップ I 世の息子である。1604 年に、そのちょっと前にハプスブルクに仕えることとなった他ならぬワレンシュタイン¹²⁾がそこでプレイをした。

1629 年に完成したコーブルクのボールハウスは、ドイツにもフランスのモデルに従って華麗な建物が建てられ、テニスが行われたことを示している。

16 世紀と 17 世紀の間は、テニスでは貴族階級が音頭を取り続けていた。これは他の色々な社会的なグループからもそう見られていたのである。

1658 年になってもまだコメニウス¹³⁾はその著書『世界図絵』でテニスを身体運動のための貴族の遊技訓練と呼んでいる。

今なお依然として様々な禁止とか制限がありはしたが、テニスは段々と多くの、まったく色々な社会層の人々がするようになった。その状況を貴族の活動ほど詳しくはないが、その時代の種々の資料がはっきりと伝えている。例えば 1558 年、フランス人のエスティエンヌ・ペルランは英国とスコットランドの様子をこんな風に描いている。

「ここでは職人 (帽子職人とか家具職人など) が 1 クローネの賭け金でテニス競技をしていた — これは他では普通ではない、特に平日にやるなんぞ。」

そしてイギリス人のロバート・ダリントン卿は 1598 年にこの競技に夢中になっているフランス人についてこんな風に報告している。

「ここでは他所のキリスト教徒全員よりも多くテニスをしています。その証拠が全国に数多くのコートがあることです。どんな小さな町にも、テニスコートが一つや二つ必ずあるのです。オルレアンには 60、パリには数百あります。他の所に同じぐらいあるとしても、フランスでは一つの教会に二つのテニスコートがあるのです。」

イギリス人の観察者に印象深かったのはテニスの普及ばかりでなく、その水準も感銘を与えるものだった。

「ここではみんな何と上手にプレイすることか、驚くばかりです。この人たちはラケットを手にして生まれてきたのではないかと、思われるぐらいです。子供たちまでも競技をマスターし、プロアで見える限りでは、女性たちまでもそうなのです。」

実際、15 世紀以来、最も重要なテニス国 — フランスとイギリス — ではますます多くのテニスコートが設置され、私営で、誰にでも開放されていた。その当時の数字の申告は穴だらけで、一部しか信用できない — とはいえ、規模の大きさは正しく挙げられている。16 世紀の終わり頃のパリーには、250 から 1800 の間のコート数が、オルレアンには — 上に挙げたように — 60 挙げられている。ロンドンには 1620 年頃にこういう競技場は 14 あった。

ドイツ語の圏内では、テニスコートの数は貴族の館を除いて比較的少なかった。こういう施設は 16 世紀と 17 世紀の間にフランクフルト、ニュールンベルク、ハレ、ライプツッ

ヒなどとその他の諸都市で造られたが、その数はほぼ50と見積もってよい。

貴族と市民ばかりか、学生たちもテニス競技に夢中になっていた。オックスフォードとケンブリッジでは数多くのカレッジが独自のコートを持っていた。ケンブリッジでは16世紀と17世紀にこの種の施設がおおよそ14に達した。現在どんなテニスクラブでもそうであるように、もうその当時から一定の競技時刻を守らなくてはならなかった。ケンブリッジのエマヌエル・カレッジでは競技活動は午後1時から5時の間と夜8時から午前3時までには休息した — 「教授連のだれかがプレイしたいと言い出しさえしなければだが。」

フランスの大学都市では大学の若者たちは、大好きなボーム競技用に、大抵は数多くの競技場を自由に使えた。例えばボワチエでは22カ所、オルレアンでは16世紀の初めには40もあった。学生たちのテニス熱が余りにも昂じて、中には学業に支障を来す恐れまで出てきたほどである。

学生たちの活動の具体的なイメージを — 風刺調に誇張してはあるのだが — ラブレーが長編『ガルガンチュアとパンタグリュエル』¹⁴⁾に描き出している。第一巻(1532年)で彼は大学の概観風に若いパンタグリュエルをフランスの色々な大学に行かせる。オルレアンでは — すぐにパンタグリュエルは気がつくのである — 学業よりもボーム競技の方が盛んだ。そこでこの地で法学の学位を目指している若者たちに対して、彼は適切なスローガンを書く。

ポケットにはテニスのボールを、
手にはラケットを、
ガウンの下には法律を、
脚にはダンスを、
持てば、もう博士のキャップが手に入る。

だから1556年にオルレアン公は競技場の半分を閉鎖させた。教授たちもその義務を疎かにし、この白いスポーツに完全に没頭していた。オックスフォードのメルトン・カレッジ年代記には1492年の下に次のような非難が見出される。「ホールト教授はテニスをする — しかも公然と。そして教会には遅刻する。」一年後にこのホールト教授はカレッジから去った — テニス熱の犠牲か？

うまいテニスプレイヤーは学友たちの間で高い名声を受けた。例えばジョン・アールは自著の『小宇宙誌』(Micro-Cosmographie)(1628)の中で一人の学生の特長を次のように描く。「二つの事が彼の進歩を証明している。彼のピロードのガウンとテニスにおける能力である。ワンセットをプレイ出来るようになるやいなや、彼はもうフレッシュマンではなくなる。」

ドイツ語の圏内からも大学のテニス活動について沢山の情報がある。そして繰り返し、この身体訓練の有用性について強調されているのである。つまり *mens sana in corpore sano* (健康な身体には健康な精神が宿る)。インゴールシュタットでは1594年に学生用の

ボールハウスが建てられる — 「娯楽と合目的な身体訓練のために」 シュトラースブルク (1618 年) のテニスに興じる学生たちの描写の下に書かれたラテン語の韻文は、古典的なディステヒョンの韻律¹⁵⁾で昔からの願いを表したものである。

Retia dum piluam faciunt hinc inde volantem

Exercet iuvenis corpus et ingenium.

Nam pila resturat malesano in corpore vires,

Torpet at assiduis obruta mens stuiis.

あちらへ、こちらへと飛んで行き交うテニスのボールで競技をして、

若者たちは身体と精神を鍛える。

このボール競技は病んだ体の中に力を再生してくれるけれど、

絶え間ない勉強に埋もれていると、精神が硬化するから。

チュービンゲンでは学生たちは 騎士アカデミー¹⁶⁾の光明カレッジ (Collegium Illustre) のボールハウスを利用出来るチャンスを持てた。ちなみに、このカレッジの一種の学業予定表の中でヨーハン・フリードリッヒ侯は、貴族たちのスポーツを潔癖に市民階級のスポーツから分けている — これは非貴族階級に対する早期のテニス禁止の基礎を成すこととなった区別だった。「通常の射撃と弩弓」の隣に彼は乗馬、撃剣、スコッチボール、ダンスのような騎士・宮廷人の練習課題を並べている。貴族、町民と学生のボールハウスでは皆テニスをした — 快適に。けれども多くの場所ではこの競技はもっとはるかに単純な条件のもとに行われた。広場とか通り (出来るだけ通行往来のない) でしたのである。昔のテニスに必要な斜屋根には、狡猾なプレイヤーたちは代わりの救済策を考え出した。例えば欠いてはならぬ屋根を家の正面に設置したのである。

最後にはテニスに興じる田舎者は、必要な屋根のためになおもう一つの臨時手段を手にとった。3 本の木杭に支えられた穀物篩 — フランス語でタミ (tamis) — をひっくり返したのである。この解決策は非常に便利なのが証明された。どこにでも手にとって運べる篩は、プレイヤーを固定した競技場から解放したのである。この篩を使つての競技の更なる進歩は、今日北フランスとヘンネガウに「篩遊び」(jeu de tamis) として残されている。大衆スポーツはもちろん経済的な側面を持つ。市が発生して、製品やら能力の持ち主やらが需要品となる。即ち、ボールとかラケットだが、教師とか教科書も必要なのである。

初期の時代のテニスボールは、56, 7-58, 7 グラムしか重量のない今日のボールとは比較にならない。当時は大抵固かった — 中空のゴムボールの利点をものに出来ずに、固い地面で跳ねるようにしなければならなかったのだから。

最上のボールは羊毛か毛髪のコブが入っていた。これはフランス語でそれに相応する名 esteufs で呼ばれていた — ラテン語の stuppa (麻屑…等の意) を語源とする言葉である。それと並んで、もっと安価なボールも作られていた、砂とか土、それどころか金属の破片が詰められたりしていたのである。

となると沢山の — 時には致命的な — 事故が起こったのも不思議ではない。危険な目に遭うのはプレイヤーだけでなく、観客も入っていたのである。1641 年のある詩に、その当時のボールハウスにおける状況が述べられていて、ボールが前列目に座って、休みなくタバコを吸っていたスペイン人に当たる。一緒にいたタバコを吸わない連中の大喜びしたことには、この弾丸はこの男の前歯を数本弾き出し、鼻を砕くのである。多分やっと 18 世紀の半ばから観客が護られ始めた。横のギャラリーと後部の内部席の前にネットが張られたのである。

16 世紀と 17 世紀のイギリスでは、テニスボールは特に頭髮と髭が詰められていたが、これは散髪屋が客から多量にふんだくることに決まっていた。この獲得の泉のことを当時の作家たちが当てこすっている。その中にはシェークスピアもいた。『大山鳴動して鼠一匹』(3 幕 2 場)の中で、ドン・ペドロとクラウディオは、どうやら恋をして夢中になっているベネディクトをからかう。

ドン・ペドロ：誰か彼が散髪屋に行ったのを見たか？

クラウディオ：いいえ、でも多分散髪屋の丁稚が来ていたのを見ました。そしてあの人のほったの昔からの飾りは、もうとっくにボール詰めに使われています。

レオナート：ほんとに。髭がなくなった分、若返りましたよ。

ちなみに、このような髪詰めのだボールがウエストミンスター・ホールの屋根裏で見つかった。

テニスボールの市場を支配していたのは、長い間フランス人だった — イギリスの生産者の腹の立つことには、フランスからのかなりの輸入量を嘆くしかなかったことである。抵抗はしたのだが — それで相当の輸入税をかけたりののだが — 例えば 1559 年には 1700 ポンドの価格のボールが、ポーム球技の発祥国から輸入された。フランスでは 16 世紀の終わり頃から、革の覆いはしばしば布と取り替えられた。もうかなり早くから見た目がずっとよいので白いボールが好まれた。ちなみに同じ理由でテニスコートの壁がしばしば黒く塗られた — 今日リアルテニス の時に普通するように。

ポーム競技の時に(もう述べたことだが)ボールはまず手で — 時には手袋をはめて — 打った。この競技の幾つかのヴァリエーションの中に、これはそのまま今日まで残っている — 例えばベルギーのフランドル地方のカーツェン(Kaatsen)がある。15 世紀の終わり頃になるとテニス用ラケットの使用が始まる。これらはまずくり抜いてない木材で造られ、タンバリンのように羊皮紙が張られていた。このようにして — という報告がある — 一時折、貴重な手書き原稿が転用され、破壊された。

テニス用ラケットへの、恐らく最も早い時期の言及は、15 世紀末のフラマン語のテキストに見出される。その中に“speelen met de raquetten”(ラケットを使つてのプレイ)が話題になっている。ラケットの使用は本当にゆっくりと定着して行く。何しろ 16 世紀

の終わり頃になっても、まだテニスボールは手で打たれているのである。時にはラケットを持ったプレイヤーと持たないプレイヤーの対抗マッチがあったりもした。そんな時、素手で打つプレイヤーには — たった1点の — ハンディキャップが認められたものだ。ロッテルダムのエラスムスの『対話集』（1533）からの引用が示しているように、当時は時にはラケットを使用するのがフェアでないと見なされもしたのである。

Nicolaus: Minus sudabitur, si ludamus reticulo.

Hieronimus: Imo reticulum piscatoribus relinquamus;
elegantius est palma uti.

ニコラウス 「網張りラケット (reticulum) を使ってプレイするほうが、汗の出方が少ないな。」

ヒエロニムス 「網張りラケットは漁師どもに任せた方がいいんじゃないか — 平手を使った方が正確に打てるし、品があるなあ。」

古いプレイと新しいプレイの相違がここでは、エラスムスによって翻訳不可能な駄洒落で表されている。(ラテン語 reticulum = 網とラケット)

テニスコートでのフェアでない、粗野な態度は、その時代には厳しい処罰を受けることがあった。そこで 1541 年にエドムンド・クネーヴット卿という人が相手を殴打したために、その右手を落とせという判決を受けたのである、最もこれには後で恩赦が下ったが。コートでとりわけはつきりせず、争いの種になり易い規則のために大きくなりがちな、激しいもめ事がしばしば伝えられている。びんたはしょっちゅうである — これは普段はむしろ上品な人たちがやった、例えばルイ XII 世 (1498-1515, 1462 生) の若かった頃である。しかしテニス競技場ではもっとひどいことも起こった。殺人や殴殺にまでも至ったのである。1551 年にボーム競技の昔からの牙城モンズで、二人のプレイヤーの間の争いが死亡事件で結末をつける。そして有名な画家カラヴァッジョ (1573-1610)¹⁷⁾ は 1606 年ローマからとんずらしなければならなかった。何しろテニスの相手を喧嘩のあげく — ラケットで? — 撃ち殺したのだから。

ラケットに初めてガット線が張られた 16 世紀の始まり以来、今日までその構造には若干の変化がある。握る柄がずっと長くなり、ラケットの頭部が卵型になり、弦がもう斜めに張られるのではなくて、柄に垂直に、また水平に張られるようになった。19 世紀の半ば頃までには、水平の弦は垂直の弦よりも細くなって、結び合わされ — 今日当たり前のようには — ただ交差して引っ張られてはいなかった。

テニスボールとラケットの製造業者はもう早くからギルドを形成してまとまっていた。これについての情報はフランスからが最も多い。すでに 1300 年頃にパリーだけで 1 デーヌ以上もの業者 (paumiers) が活動していた — テニス専門業者で、必要とされるボールを製造していたが、競技場の管理もしていた。このボミエはさし当たり刷毛業者のギルドに属していた。だがその重要性が増すにつれて、彼らは自意識が強くなり、16 世紀の半

ばには独自の組織を結成することになった — ポミエ・ラケッティエのギルドである。彼らは素朴な刷毛と箒職人たちとは、もはや関係がないと主張した。そしてそれに相応しく、そのギルドのために四つのテニスボールに囲まれたラケットを示す新しい紋章を用いた。それでいてラケット業と箒業は、後になってもしばしば同時に営業したことを示した図がある。

この誇り高い手職人は、自分の骨折りの産物全部をぶら下げている。靴ブラシ、箒、絵筆、テニスラケット — 本当に感動的な印象を与える在庫品である。16世紀から保存されているポミエ・ラケッティエ親方たち¹⁸⁾のギルド規約の中に、このテニス職人の養成と活動が事細かく規定されている。徒弟期間は3年である。その後は職人として親方¹⁸⁾に出世することが出来た。親方の試験は — ポミエの多様な職責に対応して — 幾つかの分野に亘っていた。つまり候補者はテニスボールとラケットを製造することが出来なければならなかったし、同様に2人の公認されたプロの職人を競技で負かさなければならなかった。

テニス競技場の開場時間は厳密に規定されていた — 祭日と盛儀ミサの間はプレイが許されなかった。そして善意からではあろうが、恐らく効果のなかった規定があった。即ち、プレイヤーに如何なる金額も貸し借りしてはならない。

同じ頃テニス界の一人の観察者がパリーだけで毎日投じられる金額を3000フランと見積っている。また別の同じ頃の間人が、パリーではおよそ7000人の人間がボーム競技で食っていると伝えている。つまりポミエと並んで、特に線審、いわゆるナケ(naquets)がいたのである。その仕事はいっそう複雑化した競技規則に基づいて今日よりもっと難しかった。

だからまた特別に欺瞞と買収にかかり易かった。このようにしてその職業上の身分の尊敬が失われてゆく様子が、16世紀以来、フランス語でこの職業が表されている言葉に反映されている。つまりナケとは、じきに「人のいいなりになる従僕」、下劣な人物を意味することになったのである。そこから派生した動詞naquetterは「へつらう」と「だます」と同義となった。そんなことは今日の線審はしない — でもやっぱり罵られはするが。

同様に16世紀にはすでに特殊なテニスシューズが造られた。大抵は踵がなく、しばしばフェルトの靴底がつけられた。テニス競技場の新設や改築のために — 特にボールハウスのために — 大きな金額が支払われた。要するにテニス競技は経済活性の要因となったのである。

こんなに大きなマーケットが16世紀と17世紀に作家や出版社の眼から逃れる筈はなかった。当時、テニス競技についてのハンドブックとか教科書が幾つも出版された。ただ出版物のシリーズは — 誰でもそう思ったことだろうが — フランス人とかイギリス人によって始められたのではなく、イタリア人だったのである。ガルダ湖畔のサロー出身であるアントニオ・スカイノ神学博士だが、彼は1555年『球技論』(Trattato del gioco della palla)を発表し、その中でボーム競技と並んで — タイトルが予告するように — 他の球

技も扱って、とりわけイタリアで長く人気のパローネ¹⁹⁾について述べた。けれどもスカイノは他のどの球技よりもテニスがお気に入りなのである。

それは子供たち、若者、男たちに — いや、年配者にまでも向いているのである。それは朗らかな人をもメランコリック名人をも等しく楽しませる……長くかかり、骨の折れた戦いの後に勝利者が感じる幸福感と充足感をどのように説明したらいいだろう？

勝った方はその喜びが大きすぎて、とても隠しきれず、躍り上がるほどなのである。陶酔感に浸ってスカイノは歴史の書きなぐりに夢中になる。そして傑出したテニスプレイヤーのリストを古代まで長々と遡る。何とこの素晴らしいスポーツのためにユリウス・カエサルやアレクサンダー大王の名を挙げるよう要求するのである。これ以上のテニスの宣伝は今日でも考えられまい。せいぜいのところ、ガレヌス老(129-199)²⁰⁾への効果的な指摘によって補うくらいのものである。このヒポクラテスと並んで重要な古代の医者がすでにテニスを健康促進によいとして推薦したというのである — 19世紀まで繰り返し提起された偽の主張である。ガレヌスはテニスと言っているのではなく、一般に「球技」と言っていたのにすぎなかったのだから。

スカイノは、テニス競技について知る価値のあるありとあらゆることを詳細に論じている。グランドの状態、ボールとラケット、及びこの競技の諸規則とタクティク。とはいえ彼ですらもその当時の種々に異なる慣習を統一することは出来ない。コートとかラケットの大きさについても、あるいはボールの重さについてもまだ基準がなかったのだ。スカイノは自分の著書にルーヴルにあるテニスコートの平面図を添付していて、ほぼ $37 \times 12\frac{1}{2}$ メートルの平面で、どうやら非常に大きかったらしい。

ともかく当時の他のテニスコートの復元図から推定出来ることは、その大きさがしばしばほぼ 29×9 メートルに達していることである — だから今日のコートの $23,77 \times 8,25$ メートルよりも数平方メートル大きかったわけだ。

2種類のボールが当時使われていた。ラケットなしでやる時は大きい方のボールで、手を痛めないように、あまり固くない詰め物が用いられていた。ラケットでのプレイには固いボールが用意された。

スカイノは詳しく、その頃通用していた — 戸外で行う「長いポーム」(longue paume)と決まった場所またはホール内で行う「短いポーム」(courte paume) — の競技規則を解説している。

そのうちの後の時代のテニスと目立って違う部分だけをここに挙げよう。どうやらボールはサーヴァーに相手のプレイヤーから投げられたらしいのである。更に相手のプレイヤーには、その奉仕に対して — 彼のサーヴィスに対して — 支払われることが希ではなかった。大抵は観客席の屋根にサーヴが行われたことはもう述べた。この慣習は共にサーヴを守勢に立たせる — まず打ち返す方が攻撃者になった。つまりこれはサーヴをするプレイヤーが、出来るだけサーヴィスエースで、敵にまずボールに当てさせないように努力

する、現代テニスと正反対である。

ちなみにスカイノはサーヴァーにはっきりと、「ボールを早すぎないように打つように」と忠告している。

当時のボーム競技と後のテニスとの間の、目立つ別な相違は、参加者の数がかかり揺れていたということである。しばしば3人か、あるいはもっと多くのプレイヤーが一チームを構成した。

スカイノは戦術上の忠告も与えているが、これは中には今日でも注目に値するものがある。例えばプレイヤーに絶えず敵の動きに注意を払い、決してボールから目を離さないこと、そして不利な回にはのろのろと動くことと勧めている。ダブルスのプレイヤーには、ボールを敵の両プレイヤーの間に落とすよう助言する — しばしば一方が他方に任せて、結局どちらもそのボールを取らないのだからという。

この後の数世紀には、ボーム競技を扱った論文が幾つかフランスに現れた。特に今日まで厄介な計算方法を、他ならぬフランス王の図書館司書が真剣に論じている。このムッシュー・ゴスランは1599年に『ボーム競技の数え方における2つの疑わしいケースについての解明』(Declaration de deux doubtes qui se trouvent encomptant le jeu de paulme)を表した。この面倒な問題についてはまた後に立ち戻るとしよう。

スカイノとゴスランが専門知識に富んだ素人として書いたのに対して、フォルベはテニスに関する彼の著書をプロとして編んだ。即ち、彼はボーム競技の親方だったのである。彼の論文は1599年に初めて印刷された。それはボーム競技の24の — すでに1592年に書かれていた — 諸規則を内容とする。その中に珍妙なものかなりあるが、その他は我々にもお馴染みのものである。現代の規則を想わせるのは、ワンセットの勝利のためには2ゲームのリードが必要だったということである。残念ながら今日では、勝利者がプレイヤーたちの接待費用を負担するという素晴らしい習慣は忘れ去られてしまった。これに対して、審判のもめるような決定について今日ではもはや観客が票決してはならないのは、幸いだということになろう。例えばデヴィスカップ・トーナメントでの潜在的な戦争状態なんぞ何時公然たる戦争に変化しても不思議ではないからである。

フォルベの著書は1632年に再版されたほど成功した。チャールズ・ヒュルポーはこの本に美しい銅版画のタイトルをつけて、『ボームのロイヤル・プレイ』(Le jeu royal de la paulme)という題名にした。

大抵の場合、教師から学ぶ方が書籍から学ぶより早い。これは特にスポーツについて当てはまる — だからテニスにも。その当時のボーム競技の教師については、この時代の資料がほとんど手に入らない。王室予算の唯一残っている決算書が幾らかこのテニス教師について漏らしていて、その所得は — スポーツ的、財政的観点から見て — かなりのものだった。そこで1612年、ピエール・ジャティーユという人物が、11才のルイXIII世に行った授業に対して、年に500リーヴルという相当な額をもらっている。そしてほとんど同じ

頃イギリスの国庫は、10才の王位継承者チャールズにテニスの極意を伝授したジョン・ウェッブという男に20ポンド支払っている。

ところがこれらの金額には、まやかしのことがある。その中には時にはボールとラケットの支払い額が含まれているのである。この時代のテニス教師は授業をするだけではなかった。イギリスの親方(master professionals)あるいはフランスの親方(maitre paumiers)はしばしば一人で色々なことを請け負っていたのだ。即ちプレイヤーであり、テニスコートの経営者であり、トレーナーであり、かつまたボールやラケット、ウエヤー、シューズの生産者にして納入者であって — それどころか時にはプレイヤーと観客の接待までも引き受けていたのである。彼のような職業身分のうちでは際だった落差が支配的だった。公営の競技場の経営者はしばしば飲み屋だとか賭博場経営者の近くへ移された — まさにそれらの娯楽場ではしたたかに飲んだり、博打が行われていたからである。社会的な段階の最上の端には王宮に勤務するあの人たちがいた — フランスでは王室ボーム競技の親方(maitres paumiers du roi)、イギリスでは王室テニス競技長(Masters of the King's Tennis Plays)が⁹。

テニスの授業時間を恐らく最も早く描いた絵図は、1564年出版のヨハンネス・ザムプクスによるエムプレムの書に見出される。そこでは — 無帽の — 教師が帽子を被った生徒にフォアハンドとバックハンドをどのように打つかを実演させている。もうすでに挙げた最初の女性プロ・プレイヤーであるヘンネガウ出身のマルゴートは、最初の女性トレーナーとしても名を上げた。彼女はそのプロとしての経歴を終え、修道女としてギリ近郊のある修道院に引退した後、同時代の資料によると、その土地の住民たちにボーム競技の素晴らしさを教えたという。マルゴートのテニスウエヤーについては推測するしかない。

註

- 9) サムエル・ピープス(Samuel Pepys 1633～1703) イギリス王政復古期の作家。本来、本人にはその意志のなかった日記が死後公表され、当時の状況が生き生きと伝えられることとなって、有名になった。
- 10) ボールハウス(Ballhauser) ドイツ語 Ball には 1. ボール 2. 舞踏会 という 2つの意味があるので、このような注意となった。
- 11) ボールハウスの誓約 歴史書では通常「テニスコートの誓い」と訳されている。マリー・アントワネットら王宮の貴族の浪費が伝説的に伝えられるルイ XVII 世時代に、フランスは極度の財政難に陥っているにもかかわらず、国王は無関心、政府役人は無能で、次々と打つ手がごとくと失敗したため、都市や農村の庶民のみならず、貴族の不満までも引き起こして革命につながった。主因はやはり「フランスでは、人口の10分の9は飢餓で死に、10分の1は飽食で死ぬ。」といわれる身分格差であろう。1789年6月、税金の値上げに必要な三部会の開催がやっとヴェルサイユで開かれたが、第三身分を排除しようとしたので、この身分の者たちが廷臣たちの娯楽室であったボーム競技室に集まり、弁護士ムーニエの提案に基づいて行った誓いをいう。
- 12) ワレンシュタイン(Albrecht v. Wallenstein 1583～1634) 30年戦争(1618～1648)に際してカト

リック側で活躍した将軍。ティリー（カトリック側）、G. アードルフ（スエーデンの新教徒側）などと並んで有名。ハプスブルクのフェルディナントⅡ世の軍隊の指揮者として初期には新教徒軍を撃破、かなりの勢力を広げたが、後半スエーデンからグスタフ・アードルフが進出して来て取り返すに及んで、これと手を結んだのが皇帝の逆鱗に触れ、裏切り者として解雇される。19世紀F. シラーのドラマで悲劇の主人公として描かれる。

- 13) コメニウス (Johann Amos Comenius 1592 ~ 1670) チェコの啓蒙期に活躍した教育家、指導者。元来、牧師だったが、特に言語教育に力を入れ、数多くの教科書を執筆した。その最も有名なものが『世界図絵』(Orbis Sensualium Pictus)である。
- 14) 『ガルガンチュアとパンタグリユエル』(Gargantua e Pantagruel 1532) フランス・ルネッサンス期の作家フランソワ・ラブレール (1494 ~ 1553) によって書かれた民間伝説に登場する巨人パンタグリユエルとその父ガルガンチュアの奇っ怪で、滑稽な物語。ラブレールは元来修道士であったが、古代ギリシアの研究にのめりこみ、還俗して人文主義者となり、医学も勉強してエラスムスとも親交があったために、ソルボンヌ大学の神学部から追放を受けた。全5巻のこの物語は当時の宗教関係者、特にカトリック世界を痛烈に諷刺している。
- 15) デイステヒョンの韻律 (das Distichon) ヘクサメーターとペンタメーター詩行各1行から成る2行詩節をいう。ヘクサメーターとは強弱(弱)6歩格で、ペンタメーターはヘクサメーターと構造的には大体同じで、ただ最後の歩格が強だけで終わっているものをいう。ギリシア・ローマの悲歌で用いられたので古典的な雰囲気を持ちながら、簡潔な箴言、格言的短文に適するといわれる。つまりこの両詩行の性格の相違がそこに盛られる内容の相反、対立性を強める上で効果的なのである。
- 16) 騎士アカデミー (Ritterakademie) 貴族の子弟の通った上級学校。市民階級のギムナジウムに相当する。ドイツで最初の騎士アカデミーは1594年チュービンゲンに建てられた光輝学院 (Collegium Illustre) である。
- 17) カラヴァッジョ (Michelangelo da Charavaggio 1573 ~ 1610) 初期バロック時代の大画家。ミラノなど北イタリアで修行を始め、やがてローマに移り、ここで活躍することになった。絵の主題を町の風俗的な対象に求めていたが、やがて教会からの依頼が多くなり、「マリアの死」(ルーヴル美術館在)など宗教的なテーマで多く描いた。しかし自然主義的、合理主義的な画法が教会関係者の反感を呼び、また激しい気性で様々に対立し、ついには1606年5月28日、ローマ市のフィレンツェ宮殿近くの小路でテニスの最中に争いから殺人を犯し、ナポリ、マルタ、シチリアを転々としてローマに帰ることなく客死した。しかしその影響は大きく、バロック盛期のルーベンスなど大画家に及ぼしているといわれる。
- 18) 親方たち (註7参照) 職人の同業者組合は中世以前の手工業組合や石工組合などから出発して、ほぼ13世紀頃から各地に都市が成立するにつれて種々の職業部門で定着した。手工業従事の希望者は、まず徒弟 (Lehrling) としてどこかの親方 (Meister) のもとに入門して住み込み、数年の修行を経ると一人前の職人 (Geselle) として認められ、手当をもらえるようになる。しかしギルドでその町の人数など制限されているので、まだ一軒の店とか工房を構えることは出来ない。そこで各親方のもとを遍歴して腕を磨き、そのうちに受け入れてもらえる町があると作品を提出して、つまり試験のもとに親方の称号を得て独立、店を得ることになる。ドイツでは現代ではギルド制はなくなったが、様々な分野でまだ徒弟、職人、親方のコースは生きていて、ほぼ3年ぐらいの期間で国家試験を通して昇格してゆく。
- 19) パローネ (Pallone) 風船を膨らましたもの。フットボール
- 20) ガレヌス老 (Galenus 129 ~ 199) ヒポクラテスと並ぶ古代医師世界の二大巨人。小アジアのペルガモン生まれ。ローマで名を上げて、五賢帝最後の皇帝マルクス・アウレリウスに約30年仕える。亡くなったのはシシリー島らしい。それまでギリシアの諸領土で過去研究されてきた医学をことごとくまとめて体系づけ、特に解剖学に基礎を置いた実験生理学の祖となる。彼の500年前のヒポクラテスが自然の治癒力を重く見たのに比べて、理論に傾きすぎた嫌いがあり、誤りも少なくないが、近代医学が成立するまで千数百年に亘って信じられ、役立ってきた。

The Short History of Tennis

Theo Stemmler

Yuzo TSUNETO¹⁾, Hajime OHYA²⁾

*1) College of Life Science, Kurashiki University of Science and the Arts
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

*2) Educational Support Center, Kurashiki University of Science and the Arts
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2012)

Starting with a question when tennis was born, the long process of tennis is described in this book. Even though it is certain to be a history book in that sense, this book is interesting not to trace linearly the times of tennis like a textbook of history. From the beginning this story goes along stirring the imagination of readers to unexpected direction, with description that almost all the sports were born in England though tennis in France just like hockey in China and Golf in Scotland, even though Wimbledon is in England. Even those who are not surprised to hear having hit a ball with a hand would be hard to have served a ball to the roof of cloister.

By description of influence of tennis, for example, tennis was forbidden sometimes because it in fever, passion for tennis was occurred by Mendelian factor, and hairstyle became fashionable by inspiration from the way of stringing a racket, it seems that this would improve the image of people who made up historic image by reading only the history of war.

But naturally the fate had its ups and downs in this world. The description of the process is interesting, at the first time, from age of birth in the Middle Ages to golden age passing epidemic period. It is possible to expand the image from the popular name, such as Queen Elizabeth or Henry IV who loved the beauties, although it may be bothersome that many kings or aristocrats appear.